

研究者と巡るセメント美術

美術史研究者 坂口英伸

No.4 蔵魄塔（ぞうはくとう）

前回の《男女職工》に引き続き、今回も大正時代に制作されたセメント彫刻として《蔵魄塔》を取り上げよう（図1）。

大正時代のセメント彫刻は制作数が少なく、現存作品は数点しかない。その意味では、この《蔵魄塔》は非常に貴重な作品といえる。《蔵魄塔》は関東大震災の犠牲者のための慰霊碑であると同時に納骨堂でもあり、浄心寺（日蓮宗・東京都江東区）に所在する。最寄駅は清澄白河駅で、ここは官営の深川セメント製造所があった「本邦セメント工業発祥之地」であり、本連載（ウェブ版）第2回で紹介した《浅野総一郎像》の所在地でもある。この地がセメントにゆかりの深い場所だということを再認識する。

大正時代の歴史的イベントといえば、関東大震災である。関東大震災は、日本のセメント美術を考えるうえで無視できないメルクマール（指標）である。1923（大正12）年9月1日に発生した関東大震災では、木造建築はもちろんのこと、文明開化の象徴的存在であったレンガ造の建築物までことごとく灰燼に帰した。堅牢性を大々的に謳われたレンガ造が震災であっけなく崩壊・焼失した現実を目の当たりにした人々は、復興の過程で耐震性と耐火性に優れた新素材として鉄筋コンクリートをこぞって求め、鉄筋コンクリートブームが沸き起こった。

建築界や土木界のこの動向は美術界にも波及し、大正時代後半から昭和戦前期にかけて、彫刻家はセメントを新たな美術素材として受容して作品制作に用いるようになり、ついには政府が主催する展覧会（官展）にもセメント彫刻を出品するに至った。その先駆的作例がこの《蔵魄塔》なのである。つまり《蔵魄塔》は、大正時代の美術界におけるセメントの受容の先駆けとなる象徴的な作品としての意義がある。日本ポルトランドセメント同業会（セメント協会の前身の一つ）が発行した図書『コンクリート：納骨堂と墓地』（1934年）では、《蔵魄塔》が写真入りで紹介されており、その高い注目度を推測することができる。

《蔵魄塔》の作者は、東京美術学校（東京芸術大学の前身）出身の彫刻家・日名子（ひなご）実三（1893～1945）である（図2）。日名子の名を知らぬとも、私たちは何気なくその作品を目にしている。日本サッカー協会のエンブレムである八咫鳥をデザインしたのがこの日名子なのだ。3本足の霊鳥がサッカーボールを押さえるそのデザインは、日本サッカー界におけるマスコットの存在として広く認知されている。同協会の前身である大日本蹴球協会から1931（昭和6）年に依頼を受け、日名子はこの図案を完成させたという（広田肇一『日名子実三の世界：昭和初期彫刻の鬼才』思文閣出版、2008年）。

現地の説明版や各種資料では、《蔵魄塔》の原料を白色セメントと記載するが、その真偽は不明である。国内の白色セメントの製造は、1916（大正5）年に小野田セメントが開始しており、《蔵魄塔》に白色セメントが使用された可能性は否定できない。現在では碑の

表面に白色の塗料が塗布されており、素材が白色セメントであるか判断しづらいが、制作に多額の費用を要したことは間違いない。

碑の所在地である浄心寺は、関東大震災後に震災犠牲者の臨時火葬場となり、仏教の宗派を超えた大震災横死者追弔大法会の開催場所となった関係から建立場所に選定され、《蔵魄塔》は1925（大正14）年8月30日に竣工した。かつては蔵魄塔の内側に遺骨が奉納されていたが、現在ではそれらは東京都慰霊堂（かつての震災記念堂、東京都墨田区）に移されている。《日蓮像》を制作するほどに熱心な日蓮宗の宗徒だった日名子に対して、日蓮宗の浄心寺が制作を依頼した可能性も否定できない。あるいは逆に日名子が《蔵魄塔》の設置場所の提供を浄心寺に願い出たことも想定できる。

1924（大正13）年に日名子は、試作の震災記念碑として《死の塔》と《文化炎上碑》を帝都復興創案展で発表した。日名子による初の実作として実現したのが《蔵魄塔》である。《蔵魄塔》は、目測だが、高さ約2.5m、直径約7mの半球形の構造で、やや丸みを帯びた屋上部にドームが乗る。ドームには立てた右足に両手を回して顔を隠すようにして下に向ける裸婦が高肉の浮き彫りで表現されている。その制作エピソードを『日蓮宗新聞』（1997年10月20日）は以下のように紹介している。「時代は今ほどオープンではなく、亡き人を弔うのに『女性』をレリーフにするとは何事かとクレームがついたらしい。氏は西洋流の新しい感覚で造ったのだが、不謹慎だと物議をかもしだした。しかし、氏は押し切った、とも伝えられている」。

日名子は彫刻と社会との関係性に高い関心を抱いており、彫刻家として社会へ積極的に関与した。関東大震災後の日名子は、今和次郎が提唱した「バラック装飾社」の一員として、震災後に急増したバラック（焼け残りのトタンなどありあわせの材料で建てた急ごしらえの粗末な建物）にペンキで絵を描くなど、震災後の荒んだ人心を慰撫する活動を展開した。日名子にとっての《蔵魄塔》の制作は、彫刻家としての社会活動の一環だったのかもしれない。いずれにせよ、進取の気性に富む日名子がいち早くセメントに着目し、美術素材としてセメントを《蔵魄塔》に応用したことは想像に難くない。

近隣住民の一人は、子供の頃に《蔵魄塔》によじ登って遊んだ経験があると筆者に語った。現在では《蔵魄塔》の周囲に生垣が施されるなどの整備が進み、《蔵魄塔》を気遣う配慮が感じられる。現在でも大正時代のセメント彫刻の作品が残っていることを非常に嬉しく思う。



図1 《蔵魄塔》

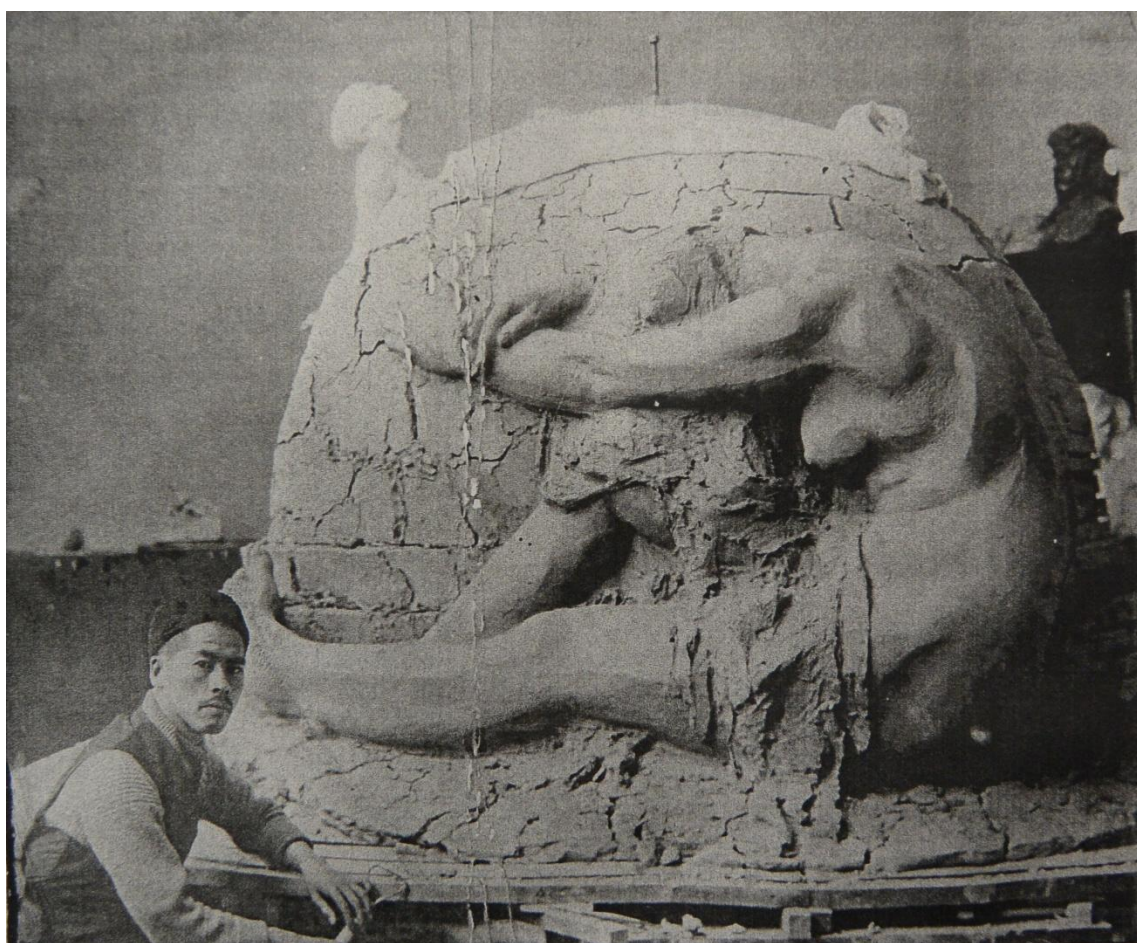


図2 《蔵魄塔》を制作中の日名子（画像提供：広田肇一氏）